

ジョン・ミュアと「場所の感覚」
—エマソン、ソーロー、メルヴィルとの対比を通して—

星野 勝利

Man in the bush with God may meet.

— Emerson, "Good bye"

はじめに

南北戦争が終わって間もない頃の 1867 年、アメリカ中西部の町インディアナポリスから一人の青年が旅に出る。目的地はメキシコ湾を望むアメリカ南部。青年の名はジョン・ミュア (John Muir, 1838-1914)。

ジョン・ミュアは三冊の本と一冊のノートを携行する。本は、聖書とバーンズの詩集とミルトンの詩集。同時に携帯したノートの表紙に、当時 28 歳の青年ミュアは、"John Muir, Earth-planet, Universe" (Turner 131) と記す。

ノートの所有者としての自分を「地球」や「宇宙」との関係で規定する旅人ミュアには、「場所」との関係において自己を眺める姿勢が見られる。地球という惑星に生きる自分、宇宙という広大な空間に存在するものとして自己をとらえる視点である。

スコットランドからの移民一世として中西部に育ったミュアは、生涯、旅を続けた。ウイスコンシン大学マディソン校での学生生活、その生活を途中で断念してカナダに向かった旅。ふたたび中西部に戻り、そこからアメリカ南部に向かい、キューバを経てアメリカ東部に戻り、パナマ経由でアメリカ西部に向かった旅。カリフォルニアに居を定め、アラスカやヨーロッパ、アジアやオセアニア、南米、そしてアフリカに向かった旅。ミュアの生涯は、文字通り地球規模の旅の生涯であった。辿られた距離から見れば、むしろ宇宙規模というべきかもしれない。

旅人ミュアにとって、アメリカ西部は大きな比重を占める。アメリカ西部に向かったミュアは、上陸した地カリフォルニアで、シエラネバダの山々を遠望する。その山々に向かったミュアは、やがてそこで新たな生活を始める。山の中で、滝の音や鳥の声に耳を傾け、岩や川と対話し、雪崩や氷河と親しむことは、ミュアにとって、「世界の中心」に近づくことにほかならなかった。

As long as I live, I'll hear waterfalls and birds and winds sing. I'll interpret the rocks, learn the language of flood, storm, and the avalanche. I'll acquaint myself with the glaciers

and wild gardens, and get as near as the heart of the world as I can. (Turner 216)

新世界アメリカの歴史は、「場所」の歴史と関わる。植民地時代以来、アメリカの歴史は西に向かう「場所」の歴史であった。西に向かって拡大し続けたフロンティアはこの頭れの一つである。ミュアが生きたのは、この時期のアメリカであった。

アメリカでは「自然」が大きな役割をはたしてきた。植民地時代以来、新世界アメリカは「自然の国」として歩み始める。エデンの園、カナンの地としての新世界は、「自然」の支配する世界であり、この「自然」は、未開の地として、「ウィルダネス（荒野）」とも等価であった。新世界アメリカにおいては、生きることは、「自然」や「ウィルダネス」との関係に置いて生きること、すなわち「場所」との関係において生きることでもあった。

旅人ミュアも「場所」との関係において生きた。「自然」や「ウィルダネス」との関係の中で生涯を送った。その生涯は、フロンティアが消滅していく19世紀後半から20世紀初頭にいたる時期のものである。ミュアの一世代前のアメリカ人、エマソンやソーロー、あるいはメルヴィルも、「場所」との関係において生きた。「自然」や「ウィルダネス」と関わる生を送った。これら三者と比べた場合、ミュアの間わり方は、どのような特質を持つものであったのか。

1. ミュアと「場所の感覚」

「自然」の国アメリカにおいて「機械」が果たした役割は大きい。「自然」の国は、聖書で示された「約束の地」「エデンの園」「カナンの園」として、一種の「庭園」である。この「庭園」に、やがて「機械」が侵入する。レオ・マークスの『庭園における機械』(Marx, *The Machine in the Garden*)は、この次第をつぶさに分析する。マークスによれば、「庭園」に侵入する「機械」は、ソーロー、メルヴィルなど19世紀の作家に限らず、フォークナーやフィッツジェラルドなど、20世紀の作家の作品にも顕著に認められるアメリカの特質である。

メルヴィルに「幸福な失敗」("A Happy Failure")と題された小品がある。一攫千金をねらって密かに製作された水圧式大型排水機械 (Great Hydraulic-Hydrostatic Apparatus) の実験と、その見事な失敗のもようを、ユーモラスに語るものである。「機械」がテーマとなる作品は、19世紀において特にめずらしいものではない。同じくメルヴィルの短編「独身者の天国と乙女の地獄」("The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids")の後者(「乙女の地獄」)では、製紙工場の巨大な機械に操られる乙女たちの悲惨な姿が描かれるし、ウォールデン湖畔で生を始めたソーローが、近くを走るフィッチバーグ鉄道の機関車を「鉄の馬 (iron horse)」「火の馬

「fire-steed）」(Walden 117)として語っているのは周知である。

青年ジョン・ミュアは「機械」に魅せられた若者であった。この意味で、19世紀的な若者であった。田舎暮らしの独学の中で読書用機械など独創的な仕掛けの機械を若くして考案し、結果としてそれが大学入学までの道を招来する。入学したミュアは、植物学や地質学に興味を示す。ただし、その途中で旅に出る。動機はやはり「機械」と関わる。自分で制作した「機械のような創造物 (mechanical inventions)」ではなく、「神の手になる創造物 (inventions of God)」について学ぶためであった (Good 42)。

ミュアの旅の原点には「神」がある。「機械」を捨象しての「神」の選択である。聖書やミルトンが旅の道連れとなったのも、このことと無縁とは思われない。放浪のミュアは、シエラネバダの山中で立ち止まる。立ち止まったミュアは、樹脂のにおいのする香しい風を飲み込み、「我が家 (ホーム)」にいる感覚に満たされる ("A Geologist's Winter Walk" 592)。シエラという一つの「場所」は、ミュアにとって、原初の「自然」の世界であり、明るい光に満ちた、平和で豊かな一種の「庭園」であった。

I leaped lightly from rock to rock, glorying in the eternal freshness and sufficiency of Nature, and in the ineffable tenderness with which she nurtures her mounta in darlings in the very fountains of storms.... Never fell light in brighter spangles, never fell water in whiter foam. (*My First Summer in the Sierra* 70)

「自然」という「庭園」の中で、ミュアは、その構造や生態に旺盛な関心を示す。岩山や川や滝の生成、気候の変化、松やモミ、トウヒやツガなどの樹々の生態、小動物や高山植物の生の姿。これらについてミュアは、微細にノートに記す。その過程で、新たな感覚も身につける。この感覚は、つまりは「神」の感覚に、きわめて近い。「あらゆるものが激しく脈打ち、生あるものすべてが歓喜し、一つ一つの岩がぎしぎしと命できしみ、大小すべてのものの上で神がすべてを雛として抱えている感覚 (every pulse beats high, every life-cell rejoices, the very rocks seem to tingle with life, and God is felt brooding over everything great and small)」(*The Mountains of California* 131)である。

ミュアにとって、「機械」を捨てることは、新たな地平を獲得することであった。「科学」や「技術」を捨てることは、青年ミュアがノートに記したように、「地球」や「宇宙」の感覚を現実を獲得することであった。これをミュアは、カリフォルニアの地、シエラネバダの山中で手に入れる。ミュアによれば、「宇宙に到るもっとも

簡明な道は、森という荒野を通ること (The clearest way into the Universe is through a forest wilderness) (Cohen 63)である。ミュアにとって、「地球」や「宇宙」に到る道は、アメリカ西部シエラネバダの「森のウィルダネス (forest wilderness)」にこそ見出されるものであった。

一世代前に生きたエマソンやソーロー、あるいはメルヴィルとの関係を探るに当たり、遅れてきた旅人ミュアの「場所の感覚」は、基本的にこのようなものであったことを確認しておく必要がある。

2. エマソンとミュア

1821年に18歳でハーバード大学を卒業したエマソンは、兄ウイリアムの経営する女学校を手伝う。学校を手伝うことは、この時が初めてではなかった。ボストン第一教会の奨学金を得てハーバードに入学した1817年、14歳のエマソンは、ボストン西方ウォルサムで教鞭を執っている。21歳の時には、トリニティ教会の部屋を借りて女学校を開設している。翌年には、コンコードの北方チェルムズファドの学校で、やはり教壇に立っている。

将来の道を模索していた若者エマソンは、一つの思いを抱いていた。この頃書かれた詩 "Good-bye" は、この思いを鮮明に示してくれる。"Good-bye proud world! I'm going home" と書き始めたエマソンは、「おべっか (Flattery)」や「仰々しさ (Grandeur)」や「富 (Wealth)」や「事務所 (Office)」で構成される「高慢な世界」に別れを告げて、次のような場所へ向かうと言う。

I am going to my own hearth-stone,
 Bosomed in yon green hills alone,—
 A secret nook in a pleasant land,
 Whose groves the frolic fairies planned;
 Where arches green, the livelong day,
 Echo the blackbirds's roundelay,
 And vulgar feet have never trod
 A spot that is sacred to thought and God. (Poems 3-4)

19歳の詩人エマソンにとって、世間の人々が踏み入ることのない「緑の丘 (green hills)」は、めざすべき「家」であり、「暖炉」であった。「思索」や「神」と関わる聖なる場所であった。

卒業後大学院に学び、ボストン第二教会の牧師として歩み始めたエマソンは、そ

の職を辞し、見聞を広めるべくヨーロッパに渡る。帰国して講演活動に入ったエマソンは、33歳の年の1836年、初めての著作として、エッセイ集『自然 (Nature)』を出版する。巻頭のエッセイ「自然」は、エマソンが詩で記した思いを反復する。身近に存在する星や樹や森の世界は、「ウィルダネス」に等しい世界である。その「ウィルダネス」でエマソンは、「町や村とは異なる親密で共感を覚える何か (something more dear and connate than in streets or villages)」を感じ取る。この世界に歩み入ることのできる人は、大人になっても「幼児の心性 (the spirit of infancy)」を維持する者、すなわち「永遠の若者 (perpetual youth)」である。そのような人にとって、「森」や「自然」の世界は、「神の植民地 (plantations of God)」にほかならない。その中でエマソンは、「透明な眼球 (transparent eyeball)」となり、「宇宙的な存在 (Universal Being)」と化す。

Standing on the bare ground,—my head bathed by the blithe air and uplifted into infinite space,—all mean egotism vanishes. I become a transparent eyeball; I am nothing; I see all: the currents of the Universal Being circulate through me; I am part or parcel of God. (Nature 10)

1838年生まれのミュアは、1803年生まれのエマソンより、一世代若い。ヨセミテの山の中に入って三年目、ミュアは、はるばる西部を訪ねてきたエマソンと会う。ミュア33歳、エマソン68歳の時である。大学時代、ミュアは、エマソンと交流のあった恩師を通して、エマソンのことを聞かされていた。現実にミュアがどれほどエマソンの著作に親しんでいたかは判然としない。しかしミュアは、1871年5月、恩師カーCarr教授夫妻のすすめもあり、訪問者エマソンをヨセミテの麓の小屋に招待し、しばし交流を楽しむ。

ボストンに帰ったエマソンは、ほとんど手つかずの自然の中で生きる山男ミュアに感謝の手紙を送る。エマソンによれば、ミュアは「山の礼拝堂 (mountain tabernacle)」に生きる人であり、「然るべき場所に生きる然るべき人 (the right man in the right place)」(Turner 215-6)である。エマソンから送られたエッセイ集を、ミュアは丹念に読む。「自己信頼(Self-Reliance)」の次の部分には、傍線が引かれる。我が身の評価と重ね合わせたことが想像される。

Welcome evermore to gods and men is the self-helping man. For him all doors are flung wide; him all tongues greet, all honors crown. (Turner 217)

エッセイ「アメリカの学徒(American Scholar)」で、エマソンは、「自然(nature)」、「書物(books)」、「行動(action)」、そして「考える人(Man Thinking)」を、キーワードとして提言する(Nature 100)。望ましいアメリカの学徒とは、これらをキーワードとして、自己を信じ、貧困や孤独を積極的に受け入れ、表象の背後に隠された事実を見抜ける人でなければならない。徒手空拳の状態で人跡未踏のウィルダネスに入り、その場所を踏査し、地質の特徴や動植物の生態をつぶさに観察する若者ミュアは、「自助の人(self-helping man)」として、さながらエマソンのいう「アメリカの学者」の化身である。

実際ミュアは、ウィルダネスの中で、エマソンのそれにきわめて類似した感覚を抱く。「自然」の中でエマソンが、「透明な眼球」となり、「宇宙的な存在」となったように、ミュアもまた、ヨセミテの湖の畔の聖なる「自然(Nature)」の中で、「宇宙的な美(universal beauty)」を感じ取り、「全身が眼 (all eye)」となる。

With inexpressible delight you wade out into the grassy sun-lake, feeling yourself contained in one of Nature's most sacred chambers...secure from all intrusion, secure from yourself, free in the universal beauty.... You are all eye, sifted through and through with light and beauty. (*The Mountains of California* 94)

エマソンとミュアの間には、一定の共通性が見られる。ただし、差異もまた確実に存在する。時間的差異、および空間的差異である。十九世紀中葉に生きたエマソンと世紀末から二十世紀にかけて生きたミュアの差異、東部ニューイングランドに生きたエマソンと西部カリフォルニアに生きたミュアの差異である。この差異は、アメリカにおける自然観や環境観の変化とも連動する。

エマソンにとって「自然」は、身近に存在するものであった。詩「さようなら」で目指した「藪」や「かなたの緑の丘」は、ボストン近郊ニューイングランドの「自然」の世界とそれほど隔たったものとは思われない。しかし、ミュアにとって、「自然」は、ヨセミテの山中の湖のように、「自然のもっとも神聖な部屋 (Nature's most sacred chambers)」であり、「あらゆる侵略からまぬがれた (secure from all intrusion)」場所であった。西漸するフロンティアの侵略からも自由な「ウィルダネス」の世界であった。これは、藪の中に身を隠す少年エマソンの「場所の感覚」とは、かなり異なるものである。

この感覚は、人間観にも連動する。「世界」と「人間」の関係は、「世界はとくに人間のために作られている」(The world, we are told, was made especially for man)というのが、一般的な理解である(Cohen 19)。ホモセントリズムとしての世界観であ

る。しかしミュアは、このような視点には立たない。ヨセミテの川で釣りに興じる「人間」を眼にしたミュアは、釣り人の釣りの楽しみよりも、釣られる側の苦しみ、しかも神聖不可侵の聖なる場所で「人間」によって生み出される苦しみに思いを馳せる。

Should church-goers try to pass the time fishing in baptismal fonts while dull sermons were being preached, the so-called sport might not be so bad; but to play in the Yosemite temple, seeking pleasure in the pain of fishes struggling for their lives, while God himself is preaching his sublimest water and stone sermons! (*My First Summer in the Sierra* 263)

ミュアの視点は、ホモセントリズムとは袂を分かたず、むしろ、エコセントリズムやバイオセントリズムに傾斜する。ヨセミテという聖なる場所において、人間は、侵入者であり、加害者であり、冒涇者である。たしかにミュアは、自然の中で、エマソンと同様、「透明な眼球」となり、「宇宙的存在」となる。ただし、ベクトルの向かう方向はエマソンと微妙に異なる。ミュアのベクトルの向かう先には、大陸の西の世界の内奥の場所、卑小な人間を包摂する聖なるウィルダネスとしての大なる自然が広がっていた。

3. ソーローとミュア

エマソンの弟子ソーローはアメリカ西部を訪ねることはなかった。東部あるいは中西部を中心に無数の講演旅行を試みた師エマソンに比べ、ソーローは、移動した距離、あるいは体験した場所という点で、おそらく師を超えることはなかった。

もちろんソーローは旅をしなかったわけではない。ボストン近郊ウォールデンの湖畔で自給自足の生活を試み、メリマック川を遡り、ケープコッドの岬を旅し、メインの森を訪ねた。しかし、これらの場所は、いずれもアメリカ東部ニューイングランド地方の文化的世界とそれ程かけ離れた場所ではなかった。この意味で、ソーローの「場所の感覚」は、師エマソンの「藪」や「緑の丘」の感覚とそれほど隔たったものとは思われない。

しかし、意識のレベルで眺めた場合、事情は異なる。エッセイ「散歩(Walking)」の中でソーローは、「散歩」の持つ意味についてくわしく述べている。それによると、散歩の場として「街」と「ウィルダネス」を与えられるとすれば、ソーローは、後者を選ぶという。散歩に出ると「街からますます離れたくなり、荒野に引きこもりたくなる(I am leaving the city more and more, and withdrawing into the wilderness)」からである。これは散歩の方角とも関わる。向かう方角として「東」と「西」がある場合、ソーローは、迷うことなく「西」を選択する。「東へ行くには強制が必要だが、

西ならば気軽に行ける (Eastward I go only by force; but westward I go free) からである。その上、「西」の世界は、次のような特質も抱えている。

The West...is but another name for the Wild; and...in the Wilderness is the preservation of the world.

ソーローにとって「西」は、「ワイルド (ネス)」と同義である。「ワイルドネス」は「ウィルダネス」とも意味的に重なる。この「ウィルダネス」は、「世界の維持」に関わる場所である。しかも、この場所には、「生」も満ち溢れている。青年ソーローは、ウォールデン湖畔で、「生 (life)」という「不可避の事実(essential facts)」(Walden 90)の探求を試みた。「ウィルダネス」としての「西」は、この「生」の世界である。

Life consists with Wilderness. The most alive is the wildest.

ソーローとミュアの間には個人的接触はなかった。しかし両者は、「ワイルド (ネス)」や「ウィルダネス」への認識で共通する。エッセイ「野生の羊毛(Wild Wool)」のなかでミュアは、さる農夫との対話について語っている。土地耕作を天職と心得る農夫に対し、ミュアは、「ワイルドネス」を残すことを主張する。これに対し農夫は、よく育ったリンゴをかざし、「果樹園のリンゴは文化、自然は矮小リンゴですよ (Culture is an orchard apple; nature is a crab)」("Wild Wool" 598)と応じる。「自然 (nature)」よりも「文化(Culture)」である。しかし、山の生活を通して野生の羊毛が牧羊のそれより遙かに勝ることを知ったミュアは、「文化」よりも「自然」に軍配を揚げる。「あらゆるワイルドネスは馴致に勝る (all wildness is finer than tameness)」のである (同 599)。この姿勢は、「絶対的自由とワイルドネス (absolute Freedom and Wildness)」を村人にすすめる散歩者ソーローのそれにきわめて近い。

ただし、シエラのミュアとニューイングランドのソーローの間には、基本的なところで、大きな落差がある。ウォールデンの湖畔の小屋で生活を始めて二年目、1846年の8月末、29歳のソーローは、メインの森に聳えるカタードイン山に向かう。二日越しでようやく頂上に到達したソーローは、風と霧の山頂で、人間と山の関係について思う。「非人間的自然 (inhuman Nature)」の姿を示している山頂は、山への登頂者に対し、次のような言葉を発している。

This ground is not prepared for you. Is it not enough that I smile in the valleys? I have never made this soil for thee, this air for thy breathing, these rocks for thy neighbors. (The

Main Woods (64)

山頂のソーローは、自然と人間の間の距離を感知する。カターディン山の頂上を支配する女神としての「自然」は、ソーローの視点では、緑の大地や清流の渓を支配する女神とは別個の存在である。山頂の女神は、人間の接近を拒む女神であり、この場所に探りを入れることは、「神々に対する侮蔑 (insult to the gods)」(65)である。

ニューイングランドという場所で「ウィルダネス」への「散歩」をすすめるソーローには、このような視点も同居する。しかし、シエラの山に入ったミュアには、このような視点は見られない。1874年の冬、ユバ川の支流を探索していたミュアは、山中で激しい嵐に遭遇する。しかしミュアは、吹きすさぶ嵐の中で、敢えて高台 *niaru* ベイツガ (*Douglas fir*) の木に登る。自然の猛威を、数時間にわたり、ありのまま体感しようと試みる。この危険な行為の中で、ミュアは、荒々しい自然の生の姿に驚喜し、「いよいよない喜び (invincible gladness)」(*The Wild Muir* 114)を感知する。

同様のことは、ヨセミテの谷を見下ろすデイナ山の山頂でも体験される。岩だらけの山頂に立ったミュアは、カターディンのソーローとは異なり、その山頂で、「自分を迎え入れてくれる神々しいウィルダネス (hospitable, Godful wilderness)」(*My First Summer in the Sierra* 295)を感じ取る。自然やウィルダネスとの関係において、二人の間の落差はやはり大きい。

人間は、自然やウィルダネスの中で、しばしばコミュニティ感覚を体験する(野田 39)。人間や動植物だけでなく、土や水、風や岩、雲や光など、地球環境のすべてが自然やウィルダネスを構成しているという感覚である。ウォールデンの湖畔で動植物を含めて微細な観察を実践したソーローに、この感覚が鋭く息づいていた事は確かである。一方、シエラの岩や水や雲や光に融通無碍に混じり合うミュアも、この感覚に溢れていたことは確かである。二人の間に落差があるとすれば、ウィルダネスという場所に対する没入度の差ということになるだろう。ウィルダネスに感溺することのできたミュアと、冷静な観察者にとどまったソーローの差である。

この差は、エコ(環境)とエゴ(自我/人間)の差と言い換えることも可能かも知れない。ウィルダネスというエコシステムの世界に没入したミュアと、ニューイングランドに生きた人間ソーローの差である。晩年ミュアは環境保護運動に邁進する。一方ソーローは奴隷廃止運動に関わる。自然と人間という二人が向かった方角の差もこのことと無関係とは思われない。

4. メルヴィルとミュア

旧約の時代、中東の砂漠地帯で、一人の男の子が生を受ける。アブラハムの妻サライのつかいめハガルの息子イシュメイルである。しかしイシュメイルは、母ハガ

ルとともに、生誕の地カナンを追われ、「荒野(あらの)」に向かう。「荒野」に生きるイシュメイルは、やがて「野ろばのような人」となり、すべての人に逆らい、すべての人に「敵して住む」(「創世記」16-12)。孤児イシュメイルの誕生である。

時代を下って、19世紀中葉、ニューイングランドの大都市ニューヨークで、一人の若者がイシュメイルを名乗り出る。作品『白鯨』の語り手イシュメイルである。ただし、旧約の若者とは異なり、このイシュメイルは、「砂漠」に生きるわけではない。すべての人に「敵して住む」わけでもない。大都会ニューヨークから捕鯨基地ニューベドフォードに向かった若者は、捕鯨船に乗り込み、大西洋を南下して、一路太平洋へ向かう。19世紀の若者イシュメイルの「砂漠」は、地球の四分の三を支配する「海」にほかならなかった。

旧約のイシュメイルと船乗りイシュメイルの間には、生きる場所として、「荒野(あらの)」と「海」の差がある。これは物理的な差である。しかし、「荒野」や「海」に向かうことが、つまりは若者の放浪の旅と関わるものと見れば、両者の距離は縮まる。ロマン派文学を分析したオーデンは、その特質として、「海」と「荒野(desert)」を指摘した(Auden, *The Enchafed Flood*, 1-38)。本来両者は、物理的場所の感覚は異なるにせよ、内質的感覚においては近似である。

若者イシュメイルが海に出たように、作者メルヴィルも海に出る。19歳の若者としてリバプール行きの商船に乗り込み、帰国して2年後、1941年の冬1月、再び海に出る。捕鯨船に乗り、太平洋に向かう。1944年10月ボストンに帰港するまで、ほぼ四年間にわたる放浪の旅が始まる。

メルヴィルが海に出た時から約四半世紀後、1867年、ミュアもまた放浪の旅に出る。大学を中退し、カナダや中西部で仕事に従事した後、インディアナポリスから旅に出る。車でレイヴィルに向かい、そこから徒歩で、ケンタッキー、テネシー、ジョージアを経て、一路メキシコ湾岸を目指す。やがて、西部シエラネバダの「荒野」へつながる旅の始まりであった。

「ミュアはつまるところ作家であった」(Cohen xiv)という見方がある。内質的「場所の感覚」と「放浪の旅」を共通項とするメルヴィルとミュアは、「作家」としても共通する。書き物を多く残したという実績だけではない。たとえばミュアは、ヨセミテのヘッチヘッチイ(Hetch Hetchy)の溪について記す時、晴れた日の風景の美しさについて、次のように読者に呼びかける。

Imagine yourself in Hetch Hetchy. It is a sunny day in June, the pines sway dreamily, and you are shoulder deep in grass and flowers. Looking across the valley through beautiful open groves you see a bare granite wall 1800 feet high rising abruptly out of the green and

yellow vegetation.... ("Features of the Proposed Yosemite National Park" 696)

あるいは、ヨセミテのメルセド川(Merced)を語るとき、美しい川の成長を子どもの成長になぞらえ、川の音や川縁の植物を擬人化し、倒置語法を採用しつつ、リズム感に満ちた修辭的文体で、次のように表現する。

Many a joyful stream is born in the Sierras, but not one can sing like the Merced. In childhood, high on the mountains, her silver thread is a moving melody; of sublime Yosemite she is the voice; the blooming chaparral or flowery plains owe to her fullness their plant-wreath of purple and gold.... ("Yosemite Valley in Flood" 587)

読者への呼びかけ、擬人化による表現、倒置語法、修辭的かつ詩的文体。文体に関わるこのような特徴は、メルヴィルの読者にはなじみのものである。「イシュメイルと呼んで欲しい(Call me Ishmael)」という呼びかけではじまる作品『白鯨(Moby-Dick)』は、この種の文章の集積物である。たとえば第一章、日曜日の屋下がりのニューヨークの海辺の情景。これを語るに際し、作者メルヴィルは、命令文、挿入語法、倒置語法を用いつつ、リズムカルな修辭的文体で、語りイシュメイルに次のように語らせる。

Circumbulate the city of a dreamy Sabbath afternoon. Go from Corlears Hook to Coenties Slip, and from thence, by Whitehall, northward. What do you see?—Posted like silent sentinels all around the town, stands thousands upon thousands of mortal men fixed in ocean reveries.... (Chap. 1)

同じく第一章、セイコ(Saco)の溪でまどろむ羊飼いについて語る部分。魅惑的でピクチャレスクなその情景を、擬人法や倒置語法が入り混じった修辭的文体で、次のように記す。

Deep into distant woodlands winds a mazy way, reaching to overlapping spurs of mountains based in their hill-side blue. But though the picture lies thus t ranced, and though this pine-tree shakes down its sighs like leaves upon this shepherd's head, yet all were in vain, unless the shepherd's eye were fixed upon the magic stream before him. (Chap. 1)

ミュアとメルヴィルの間には、このような共通性が認められる。文章表現に見ら

れる共通性、あるいは作家としての共通性である。この共通性はしかし、必ずしも視座の共通性と連動するとは限らない。ヘッチヘッチィの溪やメルセド川を語るミュアと、ニューヨークの屋下がりやセイコの溪のピクチャレスクな情景を語るメルヴィルは、修辭的表現に関しては類似性を示している。しかし、このことが、これらの「場所」についての同一の「感覚」を保証するとは限らない。

ミュアは、シエラの山々に、生きるべき世界を見出した。この世界は、ソーローのそれとは異なり、「自分を暖かく迎え入れてくれる神々しい荒野 (hospitable, Godful wilderness)」であった。ミュアにとってカリフォルニアの山々は、このような「場所」として存在した。氷河によって生み出された山々、清流が流れ、高山植物が咲き乱れるその峡谷。これらはすべて「光の山脈 (the Range of Light)」(*My First Summer in the Sierra* 309)として存在した。しかも、「主の創られたものの中でもっとも輝きに満ちた最善のもの (the brightest and best of all the Lord has built)」(同)であった。

『白鯨』のエイハブ船長は、一頭の白いマッコウクジラを追跡する。その鯨を船長は、特有の視点で眺める。その鯨は、何ものかの「仮面 (mask)」であり、「代理 (agent)」であり、「壁(wall)」である。しかも、この「仮面」や「代理」や「壁」は、「測りがたい悪意 (inscrutable malice)」を宿している (36章)。

エイハブのこの視点は、若者イシュメールにも強く感染する。鯨のとらえがたさは、つまりは、鯨の白い色のとらえがたさであり、このとらえがたさは、身近な世界のとらえがたさとも、密接に関わる。「神格化された自然 (deified Nature)」も例外ではない。夕焼け色に染まった森や空、黄金色の蝶の羽根、あるいは乙女たちの美しい頬。これらはいずれも「微妙な欺瞞 (subtle deceits)」であり、「売笑婦 (harlot)」としての危険性を内在させるものである。

... the sweet tinges of sunset skies and woods... and the gilded velvet of butterflies, and the butterfly cheeks of young girls... all these are but subtle deceits... so that all deified Nature absolutely paints like the harlot ... (Chap. 42)

エイハブやイシュメールの感覚が、メルヴィル的な感覚とすれば、ミュアとの落差はきわめて大きい。エイハブやイシュメールの目で眺めれば、「神格化された自然」も欺瞞に満ちた悪意の自然となる。巨大な白い鯨は、そのようなものとして存在し、その鯨が生きる海も、地球も、ひいては宇宙も、そのような一つの「場所」として存在する。

ミュアの場合、世界はこのようなものとしては存在しない。ヨセミテの大自然は、

掛け値なしのピクチャレスクの世界であり、原初の姿を随所にとどめるシエラの山々のウィルダネスは、悪意に満ちた自然とは全く無縁の、神々しい「光の山脈」である。

おわりに

地球規模の環境危機が叫ばれて久しい。20世紀後半以降次第に顕著になった地球環境に対するこの感覚は、21世紀の現在、ますます身近なものとなりつつある。人間と自然環境との関係を探るエコロジーが、一つの学問分野として歩き始め、環境保護運動や自然保護運動が、さまざまなかたちで身近に展開されている。自然を対象とした書きものは、ネイチャーライティングとして再検討され、文学や芸術を含めた文化全般の環境との関わり具合も、エコクリティシズムの視点から、幅広く説明が試みられている。

ジョン・ミュアは、ソーローと並び、自然環境を巡るこのような社会状況の中で見落とすことのできない存在である。国立公園構想をはやくから提唱し、シエラクラブを創設し、環境保護運動に奔走したミュアは、たしかに、21世紀の現在の世界的環境感覚を先取りした。しかし、環境保護主義者としてのミュアは、あくまでも晩年のミュアの姿である。社会的活動家としてのミュアには、その下地として、ミュア特有の自然体験、ウィルダネス（荒野）体験があった。たとえばシエラでの体験は、ミュアに、「われわれは、樹も人間も、すべて銀河の旅人（We all travel the milky way together, trees and men）」（*My First Summer in the Sierra* 186）という稀有な感覚を与えるものであった。

古代ギリシャのプロタゴラスは「人間は万物の尺度である」と述べた。ホモセントリズムにつながる視点である。この視点に立てば、地球環境、自然環境は、人間を中心に把握されることになる。これに対し、環境や生態系を基本的な尺度とするものとして、エコセントリズムの視点がある。エマソン、ソーロー、メルヴィルと同様、ミュアもまた、自然やウィルダネスというアメリカ特有の道を辿った。遅れてきた旅人ミュアの道行きが、ホモセントリズムよりも、エコセントリズムへと続くものであったことは確かである。

参考文献

Auden, W.H. *The Enchafed Flood*. New York: Vintage Books, 1950.

Emerson, R.W. *Nature, Addresses and Lectures*. Vol. 1 of *Works of Emerson*. New York:

AMS, 1979.

- , *Poems*. Vol. 9 of *Works of Emerson*. New York: AMS, 1979.
- Good, Cherry. *On the Trail of John Muir*. Edinburgh: Luath Press, 2000.
- Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America*. New York: Oxford UP, 1964.
- Melville, Herman. *Moby-Dick*. Vol. 6 of *The Writings of Herman Melville*. Evanston and Chicago: Northwestern-Newberry Edition, 1988.
- , "The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids," Vol. 9 of *The Writings of Herman Melville*. Evanston and Chicago: Northwestern-Newberry Edition, 1987.
- Michael P. Cohen, *The Pathless Way: John Muir and American Wilderness*. Madison: U of Wisconsin P, 1984.
- Muir, John. "My First Summer in the Sierra," "A Geologist's Winter Walk," "Yosemite Valley in Flood," "Wild Wool," "Features of the Proposed Yosemite National Park," *John Muir: Nature Writings*. New York: Library of America, 1997.
- , *The Mountains of California*. New York: Modern Library, 2001.
- , *The Wild Muir: Twenty-two of John Muir's Greatest Adventures*. Yosemite: Yosemite Association, 1994.
- Thoreau, H.D. *Walden*. Vol. 1 of *The Writings of Henry David Thoreau*. Princeton: Princeton UP, 1971.
- , *The Maine Woods*. Vol. 2 of *The Writings of Henry David Thoreau*. Princeton: Princeton UP, 1972.
- , "Walking," from <http://eserver.org/thoreau/walking.html>
- Turner, Frederick. *John Muir: Rediscovering America*. Cambridge: Perseus Publishing, 1985.
- スコット・スロヴィック/野田研一編著『アメリカ文学の<自然>を読む』、ミネルヴァ書房、1996年。
- 文学・環境学会編『たのしく読めるネイチャーライティング』、ミネルヴァ書房、2000年。

(岩手大学教育学部英語教育講座)